

2018 年度 修士論文

企業内鍼灸室鍼治療受診者の 即時的効果と長期的効果

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科
スポーツ科学専攻 健康スポーツマネジメントコース

5018A325-8

吉村 陽介

研究指導教員：中村 好男 教授

目次

第1章 緒言	
1.1 背景	1
1.2 先行研究	1
1.3 問題の所在	1
第2章 目的	
2.1 目的	2
第3章 方法	
3.1 対象	2
3.2 期間	2
3.3 鍼治療方法	2
3.4 評価項目	2
3.5 研究1 即時的効果の検討	3
3.6 研究2 長期的効果の検討	3
3.7 研究2 長期的効果の検討 解析方法	3
第4章 結果	
4.1 研究1 即時的効果の検討	4
4.2 研究2 長期的効果の検討	5
4.3 結果のまとめ	7
第5章 考察	
5.1 考察	7
第6章 結論	
6.1 結論	8
第7章 謝辞	8
参考文献	8

第1章 緒言

1.1 背景

今日、多くの就労者が仕事に起因する身体諸症状を抱えている¹⁾。肩こり、腰痛等の慢性的な発症は、就労時の作業能率を低下させる要因の一つと考えられる。

多くの企業が従業員の健康管理を経営的な視点で捉え、戦略的に取り組む健康経営を提唱する²⁾中で、従業員の仕事に起因する身体諸症状に対する対策は社会的急務である。

1.2 先行研究

沢崎ら(2001)は「鍼治療は、医療機関の従来の方法に比べて簡便で安価な方法である上に、職場に出向いて行うことができる利点を有する」(p.493)と述べており、従業員の健康管理方法として企業での鍼治療を提案している。更に就労者の運動器症状(頸肩部痛、腰痛、膝痛)への円皮鍼を用いた鍼治療の効果について、原則週 1 回(症状の改善が著しい場合や勤務の都合などで約 1/3 は 1 回/2 週間)の治療で 8 週間後に痛みが半減した者、著効及びやや有効に分類された者は約 9 割に達し、運動器疾患の痛みは鍼治療により多くの例で改善したことを報告している³⁾。

鈴木ら(2010)は、VDT 作業(産業医の診察を受診し、緊急の事態もしくは手術を必要とするような絶対禁忌の状態ではないと確認され鍼治療が可能とされた者)の頸こり、肩こり、眼疲労への円皮鍼を用いた鍼治療の効果について、週に 1 回の治療で 4 週間後に頸肩こりが軽減するとともに、眼疲労も改善したことを報告している⁴⁾。

山崎ら(2016)は「鍼灸治療は非薬物療法であり、薬物やサプリメントに比して副作用が極めて少なく、また、年齢を問わずに行うことができるなど、安全性と適応範囲にも優れている。」(p.8)と述べており、疲労を自覚するも医学的異常を認めない労働者に対して豪鍼を用いた鍼治療の直後効果について、主観的疲労(疲労感)だけでなく、客観的疲労(心身の活動能力の低下)にも有効であったことを報告している⁵⁾。

1.3 問題の所在

産業鍼灸の報告は治療頻度や期間を決められている場合が多いが、実際の現場では鍼治療の受診頻度を統制することは難しく、企業内の鍼治療の報告で受診頻度が統制されていない受診者の長期的効果を検討した報告は少ない。

第2章 目的

2.1 目的

企業内鍼灸室の鍼治療受診者の症状改善効果を検討するために、即時的効果と長期的効果を検討する。

第3章 方法

3.1 対象

F クリニック鍼灸室にて鍼治療を受診した F 株式会社従業員 202 名(男性 153 名、女性 49 名、平均年齢 48.9 歳)を対象とした。

3.2 期間

研究期間は 2017 年 7 月 27 日から 2018 年 12 月 27 日の 518 日間とした。

3.3 鍼治療方法

対象者の主訴に関連する筋硬結部に鍼治療を施術した。

使用鍼はセイリン株式会社製、鍼の長さは 30mm、太さ直径 0.16mm、0.18mm、0.2mm を箇所により選択し使用した。治療時間は 1 回 50 分とした。

3.4 評価項目

評価項目として Visual Analogue Scale(VAS)を使用した。

痛みに対して左端(0mm)を「痛みなし」、右端(100mm)を「想像できる最高の痛み」として、対象者自身による自己記入式で鍼治療前後に実施した。

図 1 Visual Analogue Scale(VAS)



3.5 研究 1 即時的効果の検討

対象者の初診時主訴部位を性別毎に分類し、鍼治療前後の VAS 値を繰り返しのない分散分析で解析した。

3.6 研究 2 長期的効果の検討

対象は初診時主訴部位が肩、腰の受診者とし、初診時の痛み、受診期間によって分類した。

○痛みの分類

初診時の痛み(VAS)を、軽度(VAS 1~30)、中度(VAS 31~70)、重度(VAS 71~100)と分類した。

○期間の分類

受診期間によって対象者を、

①短期間受診者

最終受診が初回から 90 日以内(受診が最初だけですぐに来なくなる)かつ最終受診から 30 日以上経過している(今後受診しない可能性が高い)者

②長期間受診者

最終受診が初回から 300 日以上経過している者

③いずれにも当てはまらない者

の 3 つのグループに分類した。

また初回のみの受診者は除外した。

3.7 研究 2 長期的効果の検討 解析方法

短期間受診者と長期間受診者の初診と最終診の人数の変化を、軽度、中度、重度毎に χ^2 検定で解析した。

短期間受診者と長期間受診者の VAS 値(治療前)の変化を軽度(初診時)、中度(初診時)、重度(初診時)別に散布図で検討した。

第4章 結果

4.1 研究1 即時的効果の検討

初診時主訴部位は男女共に、肩、腰、下肢、その他(頭、全身)、上肢の順に多く、肩、腰で8割以上であった。

図2 研究1 結果 即時的効果の検討 初診時主訴部位

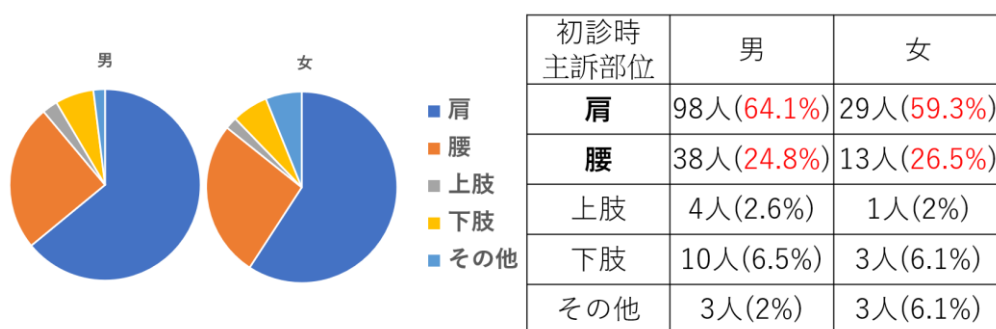
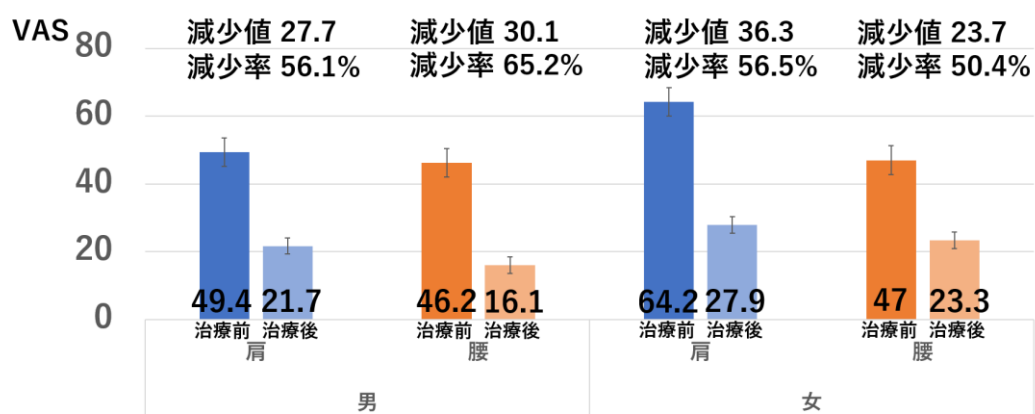


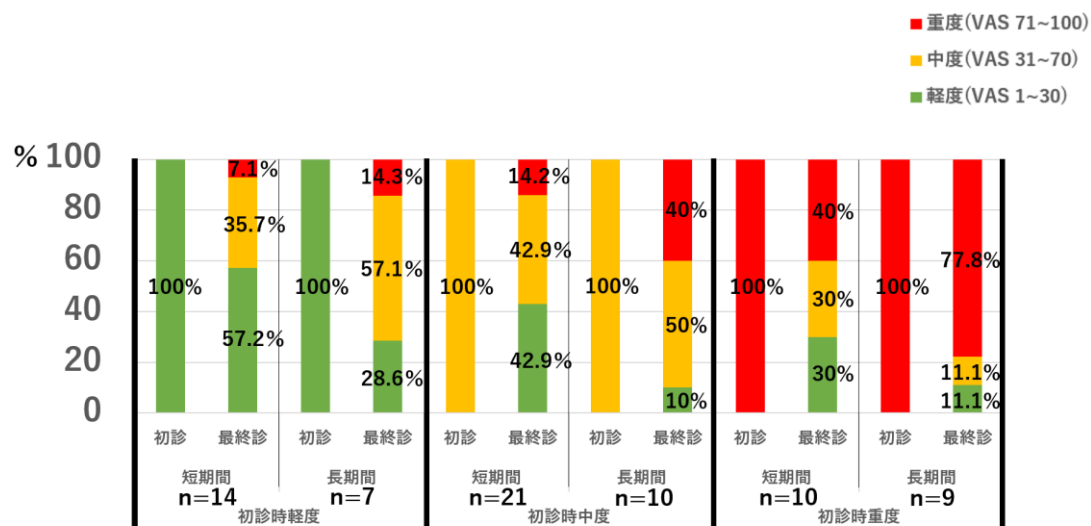
図3 研究1 結果 即時的効果の検討 痛み(部位、性別)



鍼治療直後は有意に痛みが減少した($p < 0.01$)。部位、性別で有意な差はなかった($p > 0.05$)。

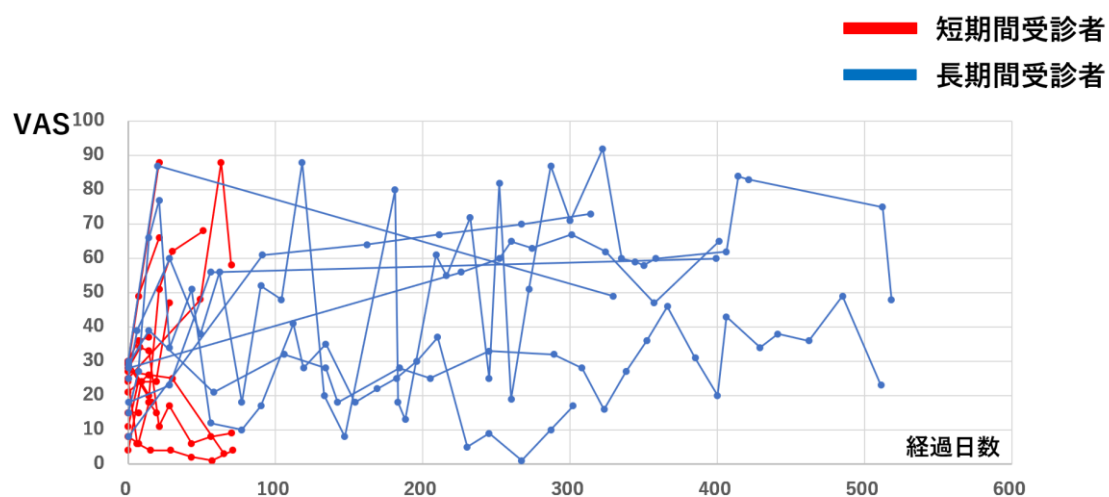
4.2 研究2 長期的効果の検討

図4 研究2 結果 長期的効果の検討 初診と最終診の変化



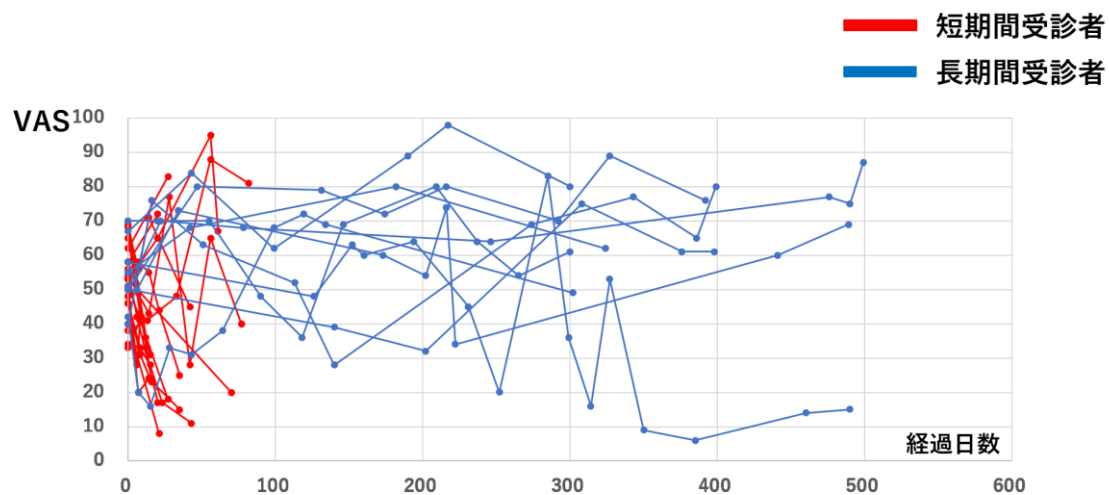
改善,維持は短期間受診者が多く悪化は長期間受診者が多いと有意に差があった($p<0.001$)

図5 研究2 結果 長期的効果の検討 初診時軽度(VAS 1~30)



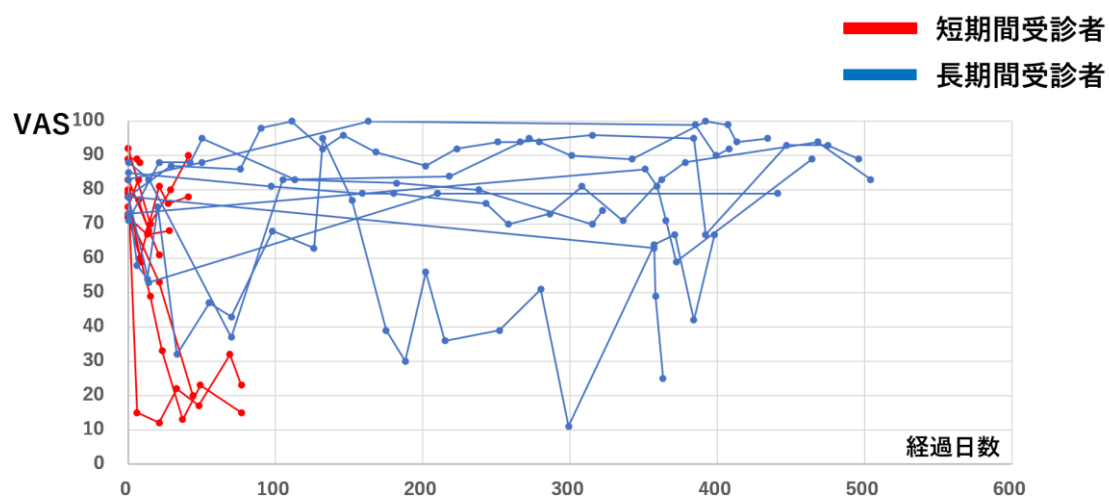
維持(軽度→軽度)は短期間受診者が多く(8人)長期間受診者は少なかった(2人)。

図 6 研究 2 結果 長期的効果の検討 初診時中度(VAS 31~70)



改善(中度→軽度)は短期間受診者が多く(9人)長期間受診者は少なかった(1人)。

図 7 研究 2 結果 長期的効果の検討 初診時重度(VAS 71~100)



改善(重度→軽、中度)は短期間受診者が多く(6人)長期間受診者は少なかった(2人)。

4.3 結果のまとめ

- 1.鍼治療直後は有意に痛みが減少した。部位、性別で有意な差はなかった。
- 2.改善は短期間受診者が多く、悪化は長期間受診者が多かった。

第5章 考察

5.1 考察

鍼治療により直後の痛みが軽減したことから、企業内鍼灸室受診者への鍼治療は、痛みが軽減した状態で仕事に戻れることを可能にした。

長期的効果は根治できているとは必ずしも言えなかった。

就労者は仕事に起因する身体諸症状を抱えている報告があることから、そうした労働環境等の原因を改善しない限り痛みはまた出る可能性があり、鍼治療のみで痛みの軽減を持続させることは難しいことが考えられる。

短期間受診者は長期間受診者に比べ、改善の割合が高かった。

短期間受診者は痛みが改善された為に受診がなくなった可能性が考えられる。

鍼治療で痛みがとれている人がいる一方で、鍼治療をしても痛みがとれない人は長く受診している可能性がある。

長期間受診者が短期間受診者に比べ改善が少ないのは、痛みがとれてもまた痛みが出ている為に受診を継続している可能性が考えられる。

第6章 結論

6.1 結論

企業内鍼灸室受診者への鍼治療は、治療直後の痛みを軽減させた。

痛みが改善している人は受診が短期間の人が多く、痛みがとれていない人は受診が長期間継続している人が多いことが示唆された。

第7章 謝辞

修士論文作成にあたりご指導頂きました中村好男先生、副査の岡浩一郎先生、新原恵子先生に感謝申し上げます。共に学び励まし合った13期生の皆様、有り難うございました。またご協力いただいた関係者の方々に深く御礼を申し上げます。

参考文献

- 1)業務上疾病発生状況等調査 平成29年:厚生労働省
- 2)健康経営優良法人2018:経済産業省
- 3)沢崎健太、木下藤寿、平野修ほか、企業内労働者における運動器症状への鍼治療の効果と医療費との関連性に関する検討、全日本鍼灸学会雑誌 51 巻 4 号;2001.5:492-499
- 4)鈴木真理、山口智、五十嵐久佳ほか、VDT 作業者に対する鍼治療効果(1)ー頸・肩こり、眼疲労に及ぼす影響ー、全日本鍼灸学会雑誌 2010 第 60 巻 5 号;2010:829-836
- 5)山崎翼、佐藤万代、矢野忠、ほか、労働者の疲労に対する鍼治療の直後効果ーランダム化比較試験ー、日本未病システム学会雑誌 2016;22(1):8-14